

島根の 古代仏教

朝鮮半島の影響を受ける島根の寺院

島根に仏教が伝えられたのはいつごろなのか、正確なことはわかっていませんが、全国的に広まったのは白鳳時代（7世紀の後半）ごろです。奈良時代の中ごろ（8世紀）には奈良の大仏や全国で国分寺の造営が始まり、仏教は国を守る宗教としての体裁を整えるようになります。奈良時代ごろの島根の仏教の初期の姿は、どのようなものだったのでしょうか。

近畿地方に建てられた古代寺院の多くは、天皇家など

の発願による造営で、国家の影響を強く受けていました。これらの寺院を「官寺」と呼んでいます。それに対して地方の寺院の多くは、地方の有力者個人の造営によるものが多く、そのため「氏寺」と呼ばれています。しかし仏教寺院の造営は、非常に高度な技術が必要としたため、少なからず外部の影響を受けていたと考えられます。当時の全国の寺院遺跡からは、法隆寺をはじめとする近畿地方の大寺院そっくりの瓦を使ったものが多く見られ、こうした大寺院の協力で地方寺院が建てられた事を物語っています。島根県内の寺院遺跡では、こうした中央の大寺院の直接的な影響はあまり見られませんが、そのかわりに、朝鮮半島からの影響を色濃く見る事ができます。当時の島根にとって、奈良の都よりも、海を隔てた朝鮮半島のほうが身近な存在だったのかもしれない。

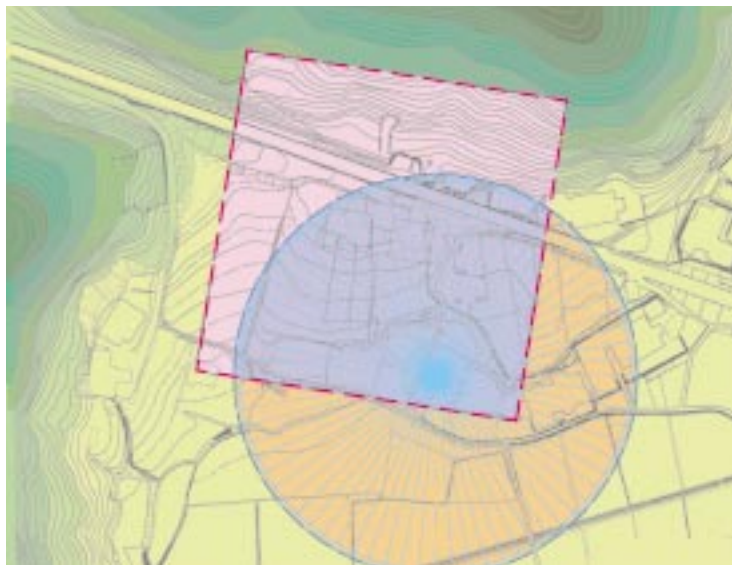


下府廃寺(浜田市下府町)
1989年に行われた発掘調査で、塔跡の隣りから石積み基礎が発見された。このことから下府廃寺は、西向き法起式式の伽藍配置であったと考えられる。

県内最古級の寺院・下府廃寺

県内の寺院遺跡の中で、もっとも古く建てられた寺院がどこなのか、厳密にはわかっていませんが、白鳳時代ごろには、寺院の造営が始まっていたものと思われる。浜田市にある下府廃寺では一九八九年から九二年にかけて発掘調査が行われ、発見された瓦から、白鳳時代にあたる七世紀末に造営された県内最古級の寺院跡と考えられています。このころの寺院がどのようなものであったか、下府廃寺を例に考えてみましょう。

下府廃寺は塔の心礎(塔の中心の柱を支える礎石)が現存しており、国の史跡に指定されています。調査は、この塔心礎の周辺を中心に進められました。その結果、塔は、一辺約二メートルの正方形の建物であったこと、塔の西側約一〇メートルに別の建物があったことがわかりました。西側の建物は一辺約一五メートルのほぼ正方形で、



下府廃寺の寺域
下府廃寺の敷地は、山を削り、谷を埋めるなど、大規模な造成工事が行われていた。その寺域はおおよそ一町四方(約1万m²)もあり、現在の出雲ドームと比べてもその広さがわかる。

石積みの基礎(建物基礎の部分)を持っています。この建物は金堂(現在の本堂にあたる建物)と考えられ、塔と金堂が東西に並んで建てていたと考えられます。

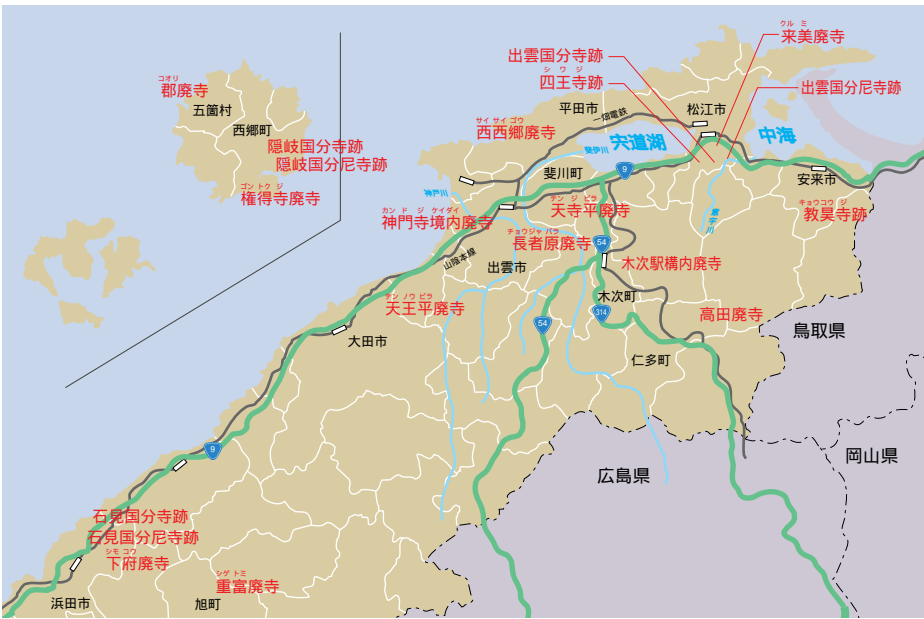
ほかの場所での調査からは、山を削ったり谷を埋めたりした様子が見られ、寺の敷地を造成していることがわかりました。整地を行った範囲から、寺域(寺の敷地の範囲)は一町四方(一辺約一〇メートルの正方形)であったと考えられます。

下府廃寺の近くには、この地域の最後の古墳と考えられる片山古墳があります。古墳時代の有力者たちは、権力の象徴として巨大な古墳を造ってききました。古墳を造らなくなったこの

時代では、壮大な寺院の建立は、同じように権力を象徴する意味もあつたのでしよう。下府廃寺を建立した人は、片山古墳に葬られた人物の子孫だったかもしれません。



郡廃寺(五箇村郡)
国分寺以前に造営されたと考えられる寺院遺跡は、隠岐島にも見られる。郡廃寺と西郷町の権徳寺廃寺では、高句麗系と言われる珍しい瓦が採集されている。



県内のおもな古代寺院遺跡
奈良時代に創建されたと考えられる寺院遺跡は、県内にほぼまなく分布している。

全国に広まっていく仏教

飛鳥時代と呼ばれる時代は、有力豪族が大陸から伝えられる新技術をごっそり導入しようとした時代でした。平安末期に書かれた歴史書「扶桑略記」によると、五二二年に来日した百濟(当時の朝鮮半島の国の一つ)の司馬達等が、今の奈良県飛鳥村に草堂を営んだとあります。草堂とは、おそらく一般の民家を改造して寺としたもので、この記載が事実とすれば、これが日本最初の仏教寺院でした。

五三八年に仏教の盛んな百濟から仏像などが送られてきたことで、異国の蛮神(外国の野蛮な神)の信仰と呼ばれる仏教を受け入れるべきか、中央政府を二分する大論争になりました。やがてこの論争に勝利した蘇我氏は、仏教を強力に押し進めていきます。五八八年には百濟から技術者が派遣され、日本最初の本格的寺院建築である法興寺(飛鳥寺)の建立が始まりました。当時の日本の建物は、地面を掘りくぼめてその上に屋根を架けた竪穴(たてあな)住居か、柱を直接地面に埋め立てた掘立柱建物で、宮殿の建築にしても掘立柱建物の床を高くしただけの高床住居でした。それに対して寺院の建築は、土盛りを石で固めた高い基段の上に巨大な礎石を並べ、柱の上に複雑な木組をして屋根を支え、大量の瓦を葺くというものでした。異国から伝わったまったく新しい壮大な建築に、当時の人びとは驚いたことでしょう。

やがて、国教としての地位を得た仏教は、またたく間に全国に広まりました。島根でも七世紀後半ごろに寺院の建立が始まります。



教興寺跡(安来市野方町)
『出雲国風土記』に記載された「教興寺」と考えられている遺跡。現在は塔心礎が残る。周辺で採集された瓦の中には、壁面で有名な鳥取県淀江町の上淀廃寺とそっくりなものもある。



天王平廃寺(大田市波根町)
島根農業大学の南にある、国道9号線を工事中に発見された遺跡。金堂と塔と考えられる建物が検出されている。ここで発見された瓦の文様は、石見一円に系譜が広がる。



塔心礎(天王平廃寺)
塔の中心となる礎石で、お釈迦様そのものを意味する舍利を納めている。